

講演

教育への〈想像力〉 —「教育保健学」というメガネで、子どもの教育＝保健現実を読み解く—

岐阜大学 地域科学部 地域文化学科 教授

同 大学院 地域科学研究科 教授

近藤 真庸

○司会者（金田） 定刻になりましたので、ただいまから講演会を開始いたします。「教育への〈想像力〉」と題しまして、岐阜大学地域科学部教授・近藤真庸先生からご講演をいただきます。それでは、近藤先生、お願いいたします。皆様、拍手でお迎えください（拍手）。

○近藤 みなさん、こんにちは。事務局の方から「できれば、総会から出てください」といわれたので、1時半から来ておりました。総会に出席し、その意味がよくわかりました。

田中会長先生のご挨拶、千田副学長先生のお話、さらには各支部の方たちの報告をうかがいながら、知性と教養、その根底にある教育観にふれ、大いに共感しました。

1. はじめに — 「教育保健学」という発想

レジュメをごらんください。話の内容は7項目にわたっています。そもそもタイトルにある「教育への〈想像力〉」とは何だろう、と思われたかもしれません。また、「教育保健学」という学問は教職科目の中にはありませんから、この「教育保健学」という用語そのものをはじめて耳にするというかたがほとんどだと思います。

しかし、「日本教育保健学会」という学会も存在しており、いまボクはその学会の理事長を務めています。「教育保健学」という学問やその発想を、教育心理学、教育社会学あるいは教育哲学や教育史とともに、教職課程で学生さんに学んでいただくことができれば、さまざまな不幸な事件から子どもの命を守れるのではないかと。そう信じて、研究を続けてきました。

実は、ボク自身、岐阜大学でも、「教育保健学」という科目の講義をする機会は一度もありませんでした。つい先日、65回目の誕生日を迎え、退職の歳になり、ご縁があって、明治大学で教職をめざす学生さんたちが聞いてくださるということで、“最終講義”をやらせていただくような気持ちでこの会場にやって参りました。ですから、こんなに盛りだくさんの内容となってしまったのです。

2. NHK大河ドラマ「いだてん」を観て、ボクは考えた！

— 2020年 東京オリンピック・マラソン競技への「5つの提言」

では、「7番」のNHK大河ドラマ「いだてん」の話から始めたいと思います。

ボクはこの「いだてん」を観て、ある新聞の投稿欄に投書をしました。

NHK大河ドラマ「いだてん」第13話で、金栗四三（中村勘九郎）がついに日本人初のマラソン走者としてオリンピック大会のスタート地点に立つ。記録によれば、26.7キロ地点で熱中症のために脱落。一命は取りとめたが、ゴールはしていない。1912年7月14日、開催地ストックホルムは異常な暑さで、日陰でも32度のため、エントリーしていた選手98人のうち、スタート直前に30人が棄権、完走できた選手はわずかに35人であった。途中で棄権した選手33人の中には、終盤熱中症で倒れて、病院に搬送され、その翌日に死亡した者もいる。

この大会では、マラソンで死者を出しているのです。「いだてん」をごらんになっていた方はご存じと思いますが、ラザロというポルトガルの選手が熱中症で亡くなっています。金栗四三はボクの母校（東京教育大学）の先輩にあたります。投書の続きを紹介します。

2020年のオリンピック・マラソン競技（男子）は、8月9日（午前7時スタート）に、最高気温35.6℃（過去三年の平均）の東京で開催される。選手のみならず、沿道で声援を送る観客やボランティアスタッフの「健康を危険にさらす」ことのないように、日時や会場・コースの変更も視野に入れた真摯な検討を、あらためて主催者に求めたい。“ストックホルムの悲劇”をくり返さないために。

他社への同一趣旨での投稿は禁止されていますので、ボクは操を立てて、新聞に投書が採用されるのを1ヵ月、2ヵ月待ちました。しかし、結局、没になったようで、掲載されることはありませんでした。

その後、ボクは、6月と8月の2度、夏休みを利用して大学院生（中国からの男子留学生）と一緒に実際のマラソンコースに足を運んで、そこを本番と同じ午前6時半にスタートして、30分ごとに暑熱環境の変化と心身への影響を調べることを企てました。といっても、大学院生は自転車、ボクは、クーラーの効いた部屋で、LINEで逐一送られてくる大学院生からのデータを待っていただけだったのですが…。送られてくるデータを観て思いました。8月9日に、このコースでマラソン競技を実施するなんて無茶だ、と。

選手だけではありません。心配なのは、観客の命です。マラソン観戦にチケットは不要です。しかも閉会式直前のプログラム。メインイベントだけに、オリンピックへの興味がだんだん盛り上がっていけば、観たいという人たちは皆そこに殺到するはず。一番いい席をとろうとすれば、どうするか。規制をしなければ、3日前、ひょっとしたら1週間前から場所とりをする人が大量に現れるかもしれない。

最寄りの地下鉄駅からどんどん人が地上に出てくる。ところが、沿道は人で埋められていますから、駅改札口を出られても、そこから階段をのぼっていけないような状況ができるにちがひありません。ホームに人が溢れ、電車から降りられないことも考えられます。

調査結果をもとに、論文を書きました。タイトルは「2020年オリンピック東京大会男子マラソン競技の教育保健学的考察 — 熱中症対策5つの提言」（「岐阜大学 デポジトリ」で検索しますと、この論文を読むことができます。興味のある方はそれを参照してください）。選手のみならず、大会スタッフや内外から訪れる観客が熱中症によって命を奪われないよう、以下の5項目を、2020年オリンピック東京大会「男子マラソン競技」の熱中症対策への「提言」としたのです。紹介します。

[提言①] 開催時期を変更し、温暖でアスリートが最高のパフォーマンスを発揮できるようにすること。

[提言②] 時期の変更が困難であれば、せめて開催場所を変更して、温暖でアスリートが最高のパフォーマンスを発揮できるようにすること。

ちなみに、東京開催を実現するための立候補ファイルには、「この時期の日本は」といって、「温暖でアスリートが最高のパフォーマンスが発揮できる気候である」と書かれています。だから、責任があるのです。そのためには、大会組織委員会は最大限の努力をしなければいけない。だから、「開催時期を変更」するか、それが無理なら「開催場所」を変更すべきだ、ということです。

[提言③] 熱中症患者の発生をおさえるため、発症の危険性が高い13歳未満の子ども（乳幼児、児童）および子ども連れ家族の、コース沿道への立ち入りを禁止すること。

[提言④] 選手のみならず、ボランティアスタッフ、沿道から応援する外国から訪れる観光客をふくむ観衆に対して、最新の科学的知見を提供（教育・啓発）し、熱中症予防のための自己管理を促すこと。

[提言⑤] 通行帯・トイレの確保および、塩分&水分の供給体制を含む万全の救急救命体制を整備し、熱中症患者の発生を最小限におさえるとともに、万が一患者が発生した場合の応急手当、救急車による迅速な搬送ができるようにすること。

と続きます。ご存じの方もいると思いますけれども、1984年のロサンゼルス大会以降、商業主義がとくに顕著になっており、莫大な放映権料を出しているアメリカの意向（アメリカで大きなイベントがないときに開催する）を反映して、真夏（7月15日～8月31日）の開催を前提に、「開催できる国はありませんか？」と立候補を募るわけです。——「東京にやらせてください」と手を挙げたわけです。であれば、立候補ファイルに記した国際的な公約を守らなければいけない。それが開催国としての責務なのです。

3. 観客の命を熱中症から守れ！ —“最悪のシナリオ”は回避できるか？

2020年のオリンピックに向けて、東京都では小・中学生がオリンピックの会場に行って応援する、そういう計画があります。会場はクーラーがきいていたとしても、子どもたちは会場まで歩いていきます。教員たちが引率していくそうです。

ボクが住んでいる愛知県豊田市で、昨年の7月中旬に、小学生が近隣の公園での校外学習で熱中症のために命を失う、という事件がありました。もし、オリンピックの引率時に一人でもそういう子が出たら、ちゃんと救急車で運べるのだろうか。命を守ることはできるのでしょうか。極めて難しい、とボクは思います。

こんな“最悪のシナリオ”が頭に浮かびました。「2020年8月8日、金曜日、午後11時」、これは男子マラソンの前日です。もし東京で実施されたとしたらという仮定で、ボクが想像して書いたものです。読み上げます。

スタート時刻まであと7時間。マラソンコース42.195キロの周辺、上空を飛ぶドローンが沿道に横たわる死体を無表情で次々とトラックに積み込む自衛隊員たちの姿をとらえる。

夜のうちに搬送作業を終えなくては、翌日、午前6時スタート予定の男子マラソン競技に支障が出る。死体の多くは家族に連れられて応援にやってきた幼い子どもたちだ。××区から動員されたという小学生の一群もいる。外国人観光客の姿もあった。1年前、2019年4月、当初の計画では午前7時半スタートだったものを、猛暑を避け、午前6時に繰り上げたこともあって、スタート時刻の気温を抑えることができた。マラソンコースもまた多額の予算を投入して、遮熱対策を施し、万全を期したはずだった。だが、それらはアスリートの命、健康を守るための対策にすぎず、観客への配慮を欠いたものであったことが露呈したのだった。予兆は既に1週間前の8月2日土曜日（女子マラソン開催日）にはあらわれていた。

沿道は本番をみるための場所とりが本格化し、熱中症患者を運ぶ救急車が頻繁に出勤していた。マラソンコースは、週末はただでさえ観光客でごった返す観光名所を通り抜けるように設定されていたため、本番1時間前というのに、地下鉄出口から地上に出るのも困難なほどであった。だが、まだそのときは、地上にさえ出られれば、移動は可能な状態であった。しかし、本番が近づくにつれて、観客は空いたわずかなスペースを求めて場所を確保すると、何日も徹夜を続けた。

朝、気がつくと、身動きがとれないほどの混雑。連日、最高気温が35度を超す猛暑日が続く中、意識を失い、倒れる人が続出。水分が尽きても、コンビニや自販機に行きたくても、動くことすらできない。垂れ流された尿や便が発する悪臭が漂い、吐き気を催した人の嘔吐物が皮膚に飛び散る。もはや言葉を発する元気もなくなり、救急車を要請する間もなく、一人また一人と倒れていった。

そして、本番3日前。地下鉄は全線始発から運休となった。車中には2日以上閉じ込められている人がいて、満員の車内からは、水をくれ、ここから出してくれと叫ぶ

声が聞こえる。窓ガラスを割り、線路に飛び出す人、ホームは人であふれ、階段を上ることすらできない状態が続いている。気温は40度を超え、湿度計は98%を示している。意識を失った人が次々と倒れ始める。本番の朝を迎えても、地下鉄は依然として止まっている。地上に出られた人々で息をしている人はもはやいない。推定死者100万人。沿道に転がる死体の処理をスタート時刻までには何としても片づけなくてはならない。

その日、ドローンがみたのは、高層ビルの真下に描かれた地獄絵図であった。

この“最悪のシナリオ”を何としても回避しなくてはなりません。「どうか〈5つの提言〉を真摯に検討してください」「いまなら、まだ間に合います」という文章で論文を結びました。

それから数ヶ月後、IOC会長の“鶴の一声”で、会場は札幌に変更となりました。

マラソン競技だけは、とりあえず会場を札幌に移したものの、その他の競技は予定どおり。東京の猛暑は変わっていません。子どもたちのオリンピック観戦計画を撤回したというニュースも聞こえてきません。

今朝のニュースをごらんになった方もいらっしゃるかもしれませんが、中高生で6,000人ぐらいのボランティアを集めるそうです。実は学校ごとに割り振りがされている。

また昨日の新聞には、オリンピックでは原則として、テロ対策の関係から、ペットボトルの持ち込みは全部禁止されていたのですけれども、猛暑が予想される東京大会では、例外的にペットボトル1本の持ち込みを認めることになりました。しかし、あの猛暑の中、みなさんも想像するとわかると思いますけれども、歩いているうちに全部飲んでしまいます。会場にたどり着いたときには、もうペットボトルのなかに水はない。そうすると、最大のスポンサーはコカコーラがやっていますので、会場にはコカコーラの製品だけはあるのですが、おそらくそれも、長蛇の列で買えない。もはや飲む水もなくて、熱中症で倒れる人たちが続出するかもしれない。

ここまで、「いだてん」から始まって、2020年のオリンピック東京大会を熱中症予防という観点からみてきました。このように、実験・実証データを踏まえて、起こりうる「現実」を想像し、現実を変えるための「提言」をしていくこと。— そこに、「教育保健学」の意義がある、ということを知っていただけたら幸いです。

4. 教師の〈想像力〉の欠如が、子どもの人権を侵害し、命を奪う！

(1) 岐阜市中学校「いじめ・自殺」事件と教師の〈想像力〉

では、「6番」に戻って、レジュメに沿ってお話します。

この7月に、岐阜市で「いじめ自殺事件」がありました。中学3年生の男子です。亡くなった「被害者」の子どもが遺したメモには2人の「加害者」の名前が書かれ、「自分が死んだら、いじめはなくなるかな」と記されていたそうです。しかし、「いじめ自殺事件」とは報道されていないのです。〈いじめがあったのは事実だけれども、亡くなった原

因はマンションから転落したことによるもので、因果関係は不明) というのです。

担任教師は、7、8月は研修、9月の終わりに辞表(依願退職)を出したそうです。岐阜大学出身の「優秀な学生」だそうです。彼がなぜそういう「未熟な指導」しかできなかったのか——「未熟な指導」というのは後でお話します。職場が忙し過ぎるということもあったでしょう。教育実習担当校なのです。岐阜県には岐阜高校という進学校があります。そこに卒業生が一番たくさん進学するといわれている中学校です。それだけに、わざわざこの地区に引っ越してくる教育熱心な親もいるようです。いじめの「被害者」も「加害者」も、そして「観客」も「傍観者」もこの中学校の3年生です。おそらく、進路選択をめぐる大きなストレスをかかえながら日々の生活を送っていたにちがいありません。

この学校に異動することができた担任教師もまた“エリート”です。そこで大過なく過ごせば、管理職への道が用意されているわけです。それは、教師にとっても大きなプレッシャーとなっていたはずです。担任教師が、自分のクラスでいじめがあった、いじめを発生させたとなれば、教員評価にマイナスの影響を及ぼしかねません。だから、「早くいじめを“解決”したい」。当然、管理職も学校管理・経営能力が問われることになります。となれば、「なかったことにしたい」という心理がはたらいとも不思議ではありません。

担任教師がおこなった「未熟な指導」の中身についてお話します。「被害者」の男子が3年生になったころから、給食のときに「加害者」の男子2人が結託して、「被害者」が嫌いなものだけをわざと配膳して、「被害者」が食べられなくて嫌々飲み込むのをみながら、周りの「観客」と一緒に笑って楽しんでいたようです。中3とは思えないような、幼稚なことをやっていたわけです。この時点では、暴力的な行為もなく、遊びの意識だったかもしれません。でも、被害者、亡くなった男の子は、屈辱的な思いをしている。

見るに見かねた小学校時代からの友だちの女の子が、その男の子に「あんなことされて、悔しくないの」といったら、「僕だって悔しいよ」と応える。「わかった。私が先生にいう」。その女の子は、父親にもアドバイスをもらい、いついつ、誰がどんなことをしたかを時系列にまとめたA4判1枚のメモを生活ノートに挟んで、先生に提出したそうです。

先生はそれを読んで、まずその女の子を呼び出します。「これは本当か?」。女の子はこういったそうです。「そうです。先生、私も聞きます。だから、先生、力をかけてください」。担任教師は、「これはいじめだな。わかった。先生に任せなさい」と応えたそうです。

そこで、問題です。その担任教師は、どんなふうにして、そのいじめを解決しようとしたか。みなさんだったら、どんな指導をしますか?

ボクが「未熟」だといったのは、担任教師がやった最初の指導です。「初期消火論」(ボクにいわせれば誤った理論) といって、(いじめはボヤのうちに消せ!) という考え方に基づく指導だったのです。担任教師は、その日のうちに、いじている2人の男子を呼び出し、メモを見せながら「指導」したようです。「これは事実なのか? 中3がどんな時期かわかっているだろう。そんなことしていたら志望校に行けないぞ」というようなことを話したのでしょうか。「加害者」は思ったはず。「調査書に書かれるかもしれない」「誰だ、チクったやつは」と。

そして案の定、その翌日から、「加害者」による“犯人捜し”が始まります。いじめは暴力的なものへとエスカレートしていくのです。

「指導」がおこなわれた5月末から自殺事件がおこる7月3日までの約1ヵ月間、担任教師は、「一度もそんな現場をみたこともないし、誰からもそのことは聞いたことはない」「いじめをされたことがあるか」「いじめをみたことがあるか」とアンケートをとったけれども、該当者はいなかった。だから、自分は、いじめは解決したと思っていた、と応えています。

みなさんも小中学生の頃に「いじめのアンケート調査」をやらされた経験があると思います。「アンケート」なのに、なぜか名前を書く欄がある。不思議でしょう。教師が言うには、「もし何かあったら、聞かなければいけないから」「うそを書くといけないということで、名前を書かせる」。もしそこに「いじめをみたことがある」「されている」と書いたら、間違いなく教師はその子どもを呼び出し、チクらせる。そして、「利用」する。

事実、あの担任教師は、「加害者」を「指導」したとき、女の子が書いたメモを、彼女に無断で彼らに見せているのです。

子どもたちは、そんな教師の意図をちゃんと見透かしていて、学生たちに聞いたら、「いじめのアンケート調査」では、誰もが「見ていない」に丸をつけるそうです。自由記述欄にも誰も記入しない。なぜかといったら、アンケートに余計なことを書いていると、「あいつ何か書いている。何かチクっている」と思われる。だから、“いじめゼロ”。この中学校もその1つだったのではないか。

ボクはこの事件について、いくつかの新聞社からコメントを求められました。ボクは記者にこう応えました。「いじめをなくすことはできなかったかもしれない。でも、死は防げたかもしれない。たくさん人間が集まれば、いろいろなトラブルが起こります。それらをみんなで解決する経験を重ねながら子どもは集団の中で育っていくのです。学校は、学びの場なのです。しかし、絶対に死に至らしめてはいけない。なによりも『被害者』の命と尊厳をまもること、そして『加害者』に寄り添う姿勢も忘れないでほしい」と。

ボクが担任教師だったらどうするか。「加害者」を真っ先に相談室に呼んで「指導」することはしません。まず「被害者」に対して声をかけます。

たとえば、廊下ですれちがったとき、その子の肩をぽんとたたいて、「最近元気ないよ。悩みでもあるのかな？ クラスメイトが、『先生、力になってあげて。自分も応援するから』って言ってるよ。もちろん先生も応援する。困ったことがあれば、いつでも先生のところにおいで。待ってるから」というように声をかけます。

岐阜の事件、もし担任教師が、そうしていたらどうでしょう？ 彼は命を絶たなかったのではないか、ボクはそう思うのです。

(2) 転校していった「みっちゃん」(11歳)が、“20歳の再会”で教えてくれたこと。

— 「いじめ・自殺事件」への新しいアプローチを求めて

なぜそう思うのか？ ボクには、11歳のときの忘れられない思い出があるからです。

「みっちゃん」の話がそれです。

ボクは、中学校から高校にかけて本当に寡黙な子でした。自分から友だちをつくることもしませんでした。というよりも、「ボクは友だちをつくってはいけない」と言い聞かせながら子ども時代を生きてきました。

小学校5年生のとき同級生だった「みっちゃん」という女の子の転校がきっかけでした。「みっちゃん、本当は一緒に卒業したかっただろうな。どうしてボクは、「みっちゃん」を守ってあげられなかったのだろう」。日に日にその思いが募ってきて、逃げ出そうとして、中学校への受験を考えるのです。でも、運よく合格してクラスメートと顔を会わすことがなくなったあとも、ずっとそれを引きずっていました。

ボクは子どものころからキャッチャーをやっており、高校では硬式野球をやっていました。甲子園に出場すれば、「みっちゃん」に会えるかもしれない、そう思っていました。日本のどこかで、ボクの名前をみて、ひょっとしたら連絡をくれるかもしれない。そうすれば、転校の真相がわかるかもしれない。しかし、結果は予選敗退。「みっちゃん」と再会する夢は遠のいてしまったのです。

ボクはすっかり忘れていたのですが、中学生の時、彼女の引っ越し先の住所に、絵はがきを1枚送っていたようです。その「みっちゃん」が、ボクが成人式で帰省したときに、絵はがきをバックに入れ、生後6ヶ月の赤ちゃんと一緒に会いに来てくれたのです。「この絵はがきのおかげで、私、今日まで生きてこられた。それを伝えたくて会いにきたの」と語ってくれました。

「みっちゃん」のお父さんは、彼女が生まれる前、正確に言うと、お母さんのお腹の中にいるときに亡くなっているのです。「光子」という名前をつけたのはお父さんだそうです。男の子だったら「光男」、女の子だったら「光子」。そして、女の子として生まれた彼女は、お父さんの遺言どおり「光子」と名づけられた。

「みっちゃん」はある日突然、その名前を奪われたのです。彼女の机には「ばい菌」と書かれていたのです。すかさず教科書で隠す様子を見て、皆は笑うわけです。彼女を追い詰め、転校を決意したのは、クラスみんなが誰も自分のことを守ってくれない、ということだったのかもしれない。

ボクが「みっちゃん」に送ったハガキは、彼女が楽しみにして行けなかった伊勢志摩の日帰りのバス旅行のときにお土産に買った、二見ヶ浦（夫婦岩）の写真入り絵はがきでした。「母も亡くなって、そして、もう死のうかなと考えていたころ、家のポストにこれが届いていた」と語る「みっちゃん」が、右手にもっていたのは、しわしわの絵はがきでした。彼女は、寂しいとき、その絵はがきを握りしめて寝ていたそうです。裏面には、「みっちゃん、幸せになれよ。幸せになったら、必ず会いにこいよ」と、黒いインクの、ボクのへたくそな文字が記されていました。

「みっちゃん」がボクにいいました。「近藤君は学校の先生になる勉強をしているんだよね。ひょっとしたら、クラスの中に私みたいな子がいるかもしれない。そして、周りに、その子のことを心配してくれる子がいるかもしれない。もしそういう子がいたら、「おま

えら、いじめやめろよ」なんて言わなくていい。先生に「いじている子がいます」なんて、そんなチクリはしてほしくない。だって、その子に迷惑がかかるから」「じゃ、どうしたらいいの？」「近藤君がしてくれたように」「ボクがしたように？」「そう、突然、背中をポンとたたかれた。ふり返ると、『びっくりした？何か元気ないからさ。元気出せよ』と。うれしかった」「たった一人でいい。親友でなくてもいい。自分のことを心配してくれる子がいるとわかれば、人は生きられる」と。

あれから45年。同じような事件がくり返されています。皆さんが教師になったら、まずその子に、「君は一人じゃない。応援している」と、そういつてあげられる教師になってほしいのです。

担任教師は、その子の死を防ぐことができたはずなのです。ボクが今一番心配していることの1つは、勇気をもって先生に「私も闘います」といった女の子が、「自分さえメモを渡さなかったら、いじめがエスカレートすることもなかった」と自分を責め続けているのではないかと、ということです。その点でも、「未熟な指導」をした教師の罪は重いです。〈想像力〉です。その子はどんな思いでメモを自分に託したか。その思いを「被害者」の子どもに伝えるのが教師の役割だったのではないかとボクは思っています。

5. はじめての「教育保健学」研究？！

ー ボクの夏休み自由研究(10歳)に、“科学が追いついた！”

ちょっと深刻な話が続いたので、「1番」の話にいきましょう。小学校3年生のときから、すでにボクは「教育保健学」の研究をやっていたらしいのです。

みなさんに、ボクの小学校3年生の自由研究をおみせしたいと思います。いきなりこんなイラストをみせると、引いてしまう人があると思うのですが、「バナナうんち」です。ここ(ステージ上のホワイトボード)に貼っておきます。

この言葉をご存じですか。「胃結腸反射」。これは重要な言葉なので、一緒に読んでいただけますか。キーワードはアウトプットするのです。——いいですね。ほかのことは覚えてなくてもいいですから、これだけでも覚えていってください。それでこそ、きょう、この会場にきた甲斐があるというものです。

小学校のときに、ボクは胃腸が弱い子どもでした。3年生の担任教師がしつげに厳しい人で、授業中にトイレに行くことを禁止しました。「トイレは、休み時間にすませておきなさい」と。先生に言えなかったのでしょう。一人の女の子がお漏らしをしちゃったのです。翌日から、その子は学校に来なくなりました。そして、転校して行きました。

「授業中に、うんちを漏らしたらどうしよう。ボクも学校に行けなくなるのではないか」。じゃあ、どうしたらいいのか？ 夏休みが近づいていたので、僕は考えたのです。自由研究でその方策をみつけよう、と。

「そうだ、朝うんちを全部出してきたらいいんだ」。そうなるわけです。ところが、「どうしたら、朝うんちを全部出せるのか、その答えは、教科書を見てもどこにも書いてないのです。ボクは何をやったか。あのころは魚屋さん、肉屋さん、八百屋さん、みんな分か

れていました。朝から一生懸命働いている人たちを、ボクは取材することにしたのです。

「おじさん、うんちいつ出している?」「朝に決まっているだろう」「へえ。どうしたら出るの?」。そして、ボクはこの「3つの数字」を獲得するのです。八百屋さんは「8」の数字、魚屋さんは「10」の数字、肉屋さんは「20」の数字を教えてくださいました。そこで、夏休みの40日間、「3つの数字」が入った方法仮説を自分の体で実験しました。

この数字は何か。「夜8時を過ぎたら、物を食べないようにしたらどうだ」と八百屋のおじさんはいいました。「8時を過ぎたら食べたらいけないということは、7時59分まで死ぬほど食べればいい」。こういわれました。「納得!」という感じでやりました。

「朝起きたら10分間運動してみたら。そのままゴロゴロすればいい。部屋の中をゴロゴロして、ターンすれば、汗をびっしょりかくよ」と、魚屋のおばさん。

「朝ご飯を20分かけて食べなさい」「よくかんで、あわてて飲み込むな」とアドバイスしてくれたのが肉屋のおにいさんでした。

そして、出ちゃったのです。なんと朝うんちを全部出せるようになったのです。

僕は喜び勇んで、夏休みの宿題をもっていくのです。——“忘れ物”をしました。何だと思いませんか。答えは、「うんち」。夏休みの間はいつ出してもよかったからです。

そこで、何時に出たかというデータを分析し、ボクは「1」というのを発見したのです。それは何かというと、「朝出かける1時間前に起きる」です。「10分間ゴロゴロする」「20分かけて食べる」。あと30分残っているから、その間にうんちが出る——出ました。それ以降、50年以上、ボクずっとこれをルーティンとして続けているのです。大人になってからは、人間ドックに倣って、さすがに「夜9時を過ぎたら物を食べない」にしましたが…。

大学生になるまで、それはボクの体だけに通用することだと思っていました。ところが、そうではなかったのです。大学の人体生理学(?)の講義で気づいたのです。先生はこういいました。「胃結腸反射という言葉を知っていますか。うんちは力むだけでは出てこない。もちろん力まなかったらだめだ。力まなかったら便秘になってしまう。便意を感じたときに出すことが大事だ」「でも、それだけでは出てこない。胃結腸反射、物が胃の中に入ったとき、反射で結腸が動く。そして、直腸に行って、便意を感じて座れば出る、これが人間の排便の仕組みなんだ。胃結腸反射が一番効果を発揮するのはどういうときか、それは胃の中が空っぽな状態に物が入るときなんだよ」といわれたとき、ボクは合点したのです。

「小学校3年生の自由研究に科学が追いついた」と思ったのです。それは大げさな言い方ですが、科学によって根拠づけられたときの喜び。「仮説」を立てて、そして「実験」をしてみて「検証」する。これが、その後ボクが研究者の道に進む原体験だったのかもしれない。

先生をされている方。みなさんの子どもたちの中にも、小学校3年生のときのボクと同じような子がいるかもしれません。子どもたちはやる気がないのでなく、そこには授業に集中できない保健的な現実があるのです。

キーワードは、「胃結腸反射」。空っぽの胃の中に食道を通して食べ物が入ったとき、より

大きな反射が起こるように、10分でもいいから体を動かして、あらかじめ睡眠モードから仕事モードに切り替えておくのです。そのことをもっと早く聞いていたら、便秘にならずにすんだのに、と後悔している人がいるかもしれません。でもまだみなさんは若い。5日間でいいので、ぜひ試してみてください。

6. 会津若松駅前公園でのライブ中に、卒論のテーマに会う(22歳)。

－ 大学区制への教育学的批判の新たな論点

「2番」の話にいきます。高校では甲子園をめざす球児だったボクは、大学では、歌を歌っていました。ライブをやっていました。本当だったら、講演で必ず1曲は歌うのですが、残念ながら今日は時間の関係でできません。

大学時代、夏休みになると、1ヶ月余り、地方で合宿をして、地元の音楽グループと一緒にイベントをするといった活動もしていました。

4年生の夏、たまたま会津若松で合宿することになり、駅前で路上ライブみたいなことをやっていました。ここに会津出身の方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、「会津高校でなければ男でない」とか、そういう言葉が当たり前のように中学生の口からも語られるような土地柄でした。

だから、中学浪人の子たちがその公園のところでいて、ボクらが一所懸命に歌っていても、誰も反応してくれないのです。中学生でもなく、高校生でもない「中学浪人生」。何でこんな「現実」があるのか。その4年前、学区が広がって(大学区制)、その子たちが住む郡部からも会津高校に行けるようになったことも、無関係ではないようです。

健康教育に関心をもっていたボクには、それが「教育権」保障だなんて思えなかったのです。想像してみました。子どもたちは睡眠を削り、朝食も摂れない、排便の時間も惜しんで長距離通学をしているにちがいない、と。

ボク、高校の保健室を訪ねることにしました。直感的に、「保健の先生だったら知っているかもしれない」と思ったからです。「どうですか、最近の高校生は？」といたら、「最近の子は本当に弱くて、朝から保健室に来て、寝かせてください」「いつごろからですか」「そうだね、この4、5年かな」。ぴったり合っています。ちょうど4、5年前に校区が、中学区から大学区へと広がったのです。

郡部から市内へと、遠くから通学しているわけです。当時、JRは国鉄といっていました。時刻表をみると、2時間に1本です。とんでもなく早い時刻に駅に着き、その間ずっと駅のベンチで待っていなければいけない。ボクが「この子はどこから通っているのですか」と訊ねると、保健の先生がいきました。「この子は会津田島というところからで、早く学校に来るんだよね。もっとゆっくり来ればいいのに」。先生たちは知らないのです。電車通学している子どもたちが何時に寝て、何時に起き、どんな思いでその電車に乗って通学してきているのかを。そして帰りも、この電車に間に合わなかったら大変だというわけでは部活にも参加できない。

ボクは、この5年間の「保健室利用ノート」を借用して、保健室の机に座り、保健の先

生と会話をしながら「正」の字を書いてデータをとることにしました。内科的主訴といたしますけれども、何となく頭が重いかお腹が痛いという子がふえているのです。しかも、その子たちの名前をチェックして、通学区域の地図にチェックしていくと、郡部の子たちが圧倒的に多いことがわかりました。

そしてついに、会津地区約6,000人の高校生に、同じ日時にアンケートをとることに成功するのです。そのときほど、「東京教育大学」の学生でよかったと思っただけではありません。先輩というのは本当にありがたい。みなさんにとっては「明治大学」がそうです。後輩のためだったら力を貸してくれるでしょう。あのころの校長先生は、ほとんどが先輩だったです。「わざわざ来てくれたのか」といって、命令(?)でやらせてしまいます。

とはいっても、先輩にあまり無茶なことをやらせては何だからということで、「今朝、うんちしてきたか?」「朝ごはんは、食べてきたか?」「何時間、寝たか?」「通学時間はどれだけか?」 — それだけを聞くことにして、集まったデータを「30分以内の通学時間の子」と「1時間以上かかっている子」で比較したのです。疫学的方法といえます。

予想どおりの結果でした。遠距離通学の子たちは、睡眠を削り、朝食を食べずに、排便もせずに学校に来ている。これが高校3年間続くのです。

データに基づく「提言」は力を持ちます。この子たちがせっかく学んでも、将来、途中で体を壊したら何にもなりません。ボクは保健の先生に1つの提案をすることにしました。「このデータをみてください。これが時刻表です。それに合わせて、学校の時間割はつくれませんか」と。実現しました。

そして、校長には、「県会・市議員さんたちの多くは地元の高校の卒業生です。その人たちの力をかりて国鉄に働きかけて、高校の時間割に合わせたダイヤを組んでもらえるようにしてもらえませんか」。

高校の先生方の組合には、「署名運動ができないか」と、お願いしてみました。

ダイヤ改正は実現しませんでした。問題意識は共有してもらえたようです。

大学区制そのものも廃止には至りませんでした。しかし、こうした経験を通して、たとえ大学生の卒業論文であっても、問題意識と仮説が明確であって、実験・実証の方法論が論理的でさえあれば、学校・地域を動かすことはできる、ということを確認しました。

ボクが研究者の道を志すきっかけとなったのが、この卒業研究だったのです。

7. みんながハッピーになる、ソフトボールゲームを創る!

— 「近藤ルール」の発明発見物語

「3番」の「ソフトボール」の話もさせてください。高校時代のボクは、甲子園にあと少しで手が届くくらいのチームのキャッチャーでした。ただ、入部したときから、同じキャッチャーのポジションにはボクよりもちょっとだけ肩のいい子がいたのです。同級生です。ショートに回してくれたら、間違いなくボクはレギュラーになれたはずですが、監督は、「だめだ。キャッチャーは怪我をしやすいポジションだから」という理由でした。

スーパーサブの嘆き。どんなに練習しても、僕は試合に使ってもらえないのです。その

頃、漠然と考えていたことがあります。もし自分が保健体育教師になってソフトボールの授業をすることになったら、「みんなが幸せになるようなルール」をつくらう。チャンス到来。大学でソフトボールの授業を担当することになったのです。

「近藤ルール」。たった1つだけオフィシャルルールを変えるだけで、グラウンドに笑顔があふれる、こんなルールをご存じですか？

「味方投手制」。ソフトボールをやると、相手を抑えるために、腕に覚えのあるやつがバーッと投げるわけです。すると、みんな三振かフォアボール。完封勝利で悦に入っているのは投手だけであって、チームメイトからいわれるのです。「おまえ、打たせろよ。何のために守りがいると思っているんだ、守っている意味ないじゃん」「だって、おれ、三振とったぞ。そのおかげでチームは勝利した。何が悪い？」

ボクは、投手に「打たせろ」とは絶対いいません。どうするか。「じゃ、味方にピッチャーをやってもらうことにしよう」。こう提案するわけです。「えっ、どういうことですか？」「まず、ボクが手本やるから見ていてね」。

長年スーパーサブのキャッチャーをしてきたおかげで、ボクにはちょっとした特技がありまして、バッターに1度スイングをしてもらえれば、どこが一番のヒットポイントかすぐわかります。そのタイミングに合わせて、コントロールよく投げるのです。ブーン、外野まで飛んでいきました。その子は今まで一度もバットに当たったことのない子だったようです。家に帰って母親に、うれし涙を流しながら言ったそうです。「きょう、生まれてはじめてバットに当たった」と。なんか感動するでしょう。

その子が次の週、いったのです。「1塁ランナーになったとき、塁に出たことがないからどうしていいかわからなかったら、みんなが教えてくれた。そして、初めてホームベースを踏んで、みんなとハイタッチしたとき、胸がジーンとした。これまで、オフィシャルなルールが当たり前だと思っていた。みんなが幸せになるように、ルールは変えていけばよいのですね」。

その他、「近藤ルール」には、「全員打撃制」というものもあります。メンバー全員の打順が一巡するまでイニングは続くので、バッターはアウトカウントを気にする必要がありません。攻守交代による時間的ロスも少なく、「味方投手制」との相乗効果で、とにかく打つ機会も守る機会も多くなります。

また、「全員守備制」というルールもあります。サードを守っていた女の子で、投げる力のあまり強くない子が、ボールをとめることだけを一所懸命練習していました。「ショートの子に、トスすれば投げしてくれるから」。わかりますか？ その子が投げるのが苦手なことがわかっていますから、ショートの子がずっと近づいていき、ボールをもらおうと、シュッと投げて、ハイタッチをして、イエーイ。みんなでアウトを成立させる。

まだまだ、こんなルールもあります。「フリーランニング制」。打球が、外野の間を抜けてフェンスに向けて転々とするのをみて、たらたらと歩きながらダイヤモンドを一周している学生がいますよね。ボクはそれが気に入らない。「走れよ」といっても、「どうせホームランだから」というだけです。「フリーランニング制」では、ダイヤモンドを何周回っ

でもいいことになっています。つまり、ホームラン性の打球で何点も獲得することができる。それを阻止するために、野手も必死になって追っていく。そして、中継プレイでどこかのベースのところまでボールが届いたら、そこでストップとなるわけです。

肩のいい子は肩の弱い子に「ここまで投げろよ」なんていわない。近くにいて、すぐもらって、遠投してアウトにする。喜びが2倍になる瞬間です。こんなソフトボールの授業をボクは、30年ちかく、ずっとやってきました。

こんなふうに、みなさんたちも教職についたら、大いに〈想像力〉を働かせながら、「みんなが幸せになるルール」づくりに挑戦してみてください。

8. 親友の命を奪ったのは「津波防災マニュアル」だった！

－「津波防災マニュアル」に異議あり！

あとまだ5分あります。最後にもう1つだけ。「4番」の「津波防災マニュアル」についてです。

宮城県の石巻市立大川小学校でたくさんの子どもと教師が亡くなりました。その中にボクの親友がいました。3年生の担任、佐々木祐一くん。大学院時代の4年間を共に過ごした彼が亡くなったことで、ボクは何度も石巻を訪れることになりました。

今年の3月、「大川小の悲劇」と「釜石の奇跡」を対比して、津波防災マニュアルの見直しを訴えた文章を毎日新聞に投稿しました。数日後に掲載してもらえることになりました。ちなみに、その1ヶ月後に投稿して没にされたのは毎日新聞ではありません。毎日新聞に投稿しても、2ヶ月連続ではさすがに載せてくれないだろうと思ったのです。これがいけなかった。毎日新聞に投稿すればよかったと後悔しました。

冒頭部分だけを紹介します。

地震時の引き渡し見直しを。3.11は宮城県石巻市立大川小学校の教員だった親友が津波で命を落とした日だ。あの日、親友とその教え子から逃げる機会を奪った原因の1つは、保護者引き渡しに要した時間だった。

大川小学校のマニュアルには「震度6弱以上の場合、保護者引き渡し」と書いてあったのです。このことはなぜか報道されていません。皆さんが教師だったら、マニュアルを無視して、勝手に逃げることはできない。だから、マニュアルは考えに考え抜いて、あらゆる事態を想定する。事故後、あのとき「山になぜ逃げなかった」という批判が噴出しました。教師の「臨機応変」の判断力の乏しさが事故の要因とされたのです。

マニュアルには「山に逃げる」とは書いてなかったのです。保護者を巻き込むマニュアルに「臨機応変」の対応を臨むことは不可能です。

親たちもマニュアルは読んでいないけれど、参観日にやる保護者引き渡し、あの記憶が残っているから、「一刻も早く学校に子どもを迎えにいかなくては」「先生に迷惑をかけてはいけない」「怖い思いをしているだろうから、はやく家に連れ帰って安心させてあげた

い」。こうして、学校に向かおうとした。でも、行けなかった親が大半でした。

教師たちは、子どもたちと一緒に校庭に出て、励ましながら親の迎えを待った。子どもと教師の命を奪ったのは、保護者引き渡しに要した“空白の50分間”だったのです。

ボクは〈想像〉するのです。教師だって逃げたかったと思います。子どもがいる。両親がいる。奥さんがいる。夫がいる。頭に浮かんだことでしょう。けれども、すぐに思い直す。「自分は教師なのだ。この子たちの命を守らなければいけない。必ず、母親たち、父親たちはこの子たちを迎えに来る。最後の一人まで引き渡しを終えるまで任務を遂行するのだ」と。—— そのとき、津波が襲ったのです。

ボクの主張の核心は、マニュアルを改め「保護者引き渡しをやめるべきだ」です。そして、早急に、数日間生き延びられるだけの食べものと水、冷暖房機器を備えた、安全で丈夫な避難所の建設を急ぐのです。万一の場合、そこをめぐって一目散に逃げる。そのための訓練も怠らない。保護者にもいう。「子どもの命は守ります。保護者の皆さんは自分の命を守ってください。自分の家族を守ってください。会えるまでに何日かかるかわかりませんが、でも、1ヵ月たったとき、生きていてよかったね、その時間を必ずつくるために、絶対に命を落としてはいけません」と。

お隣の岩手県釜石市では、震災の3年前にそのマニュアル、保護者引き渡しをやめていて、3,000人ぐらいいた子どもたちの大半が助かった。学校にいなかった子どもたちも、日ごろから訓練していたように、みんな「津波てんでんこ」で、できるだけ高いところに向かった。この子たちは自分の命を自分で守ったのです。

「釜石の奇跡」と「大川小の悲劇」。この二つの事例を対比しながら、ボクは投稿をしたのですが、どれぐらいの人たちがそれを読んできたでしょう。

まだまだ、教育現場では、「いやあ、津波なんか来ないよ」というような希望的観測が蔓延しています。津波だけではなく、豪雨被害による堤防決壊も同じです。もしあの災害が休みの日ではなくて、子どもが学校にいる時に発生していたら、教師は子どもたちの命を守れたでしょうか？「保護者に迎えに来てください」が通用しないことは明らかです。これも〈想像力〉の問題です。

学生さんたちにいいます。どうか教職についてください。そして、今日の話、職場の人たちに伝えてほしいのです。

たくさんの方が会場に来てくださり、熱心に聴いていただき感激しています。機会がありましたら、そのときはぜひ、歌もまじえてお話しさせてください。

ご静聴、ありがとうございました（拍手）。

○司会者 近藤先生、ありがとうございました。